幼児の教育　第90巻　第５号　平成３年５月１日（毎月１回１日発行）昭和23年４月15日第三種郵便物認可　ＩＳＳＮ0289－0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1991 5

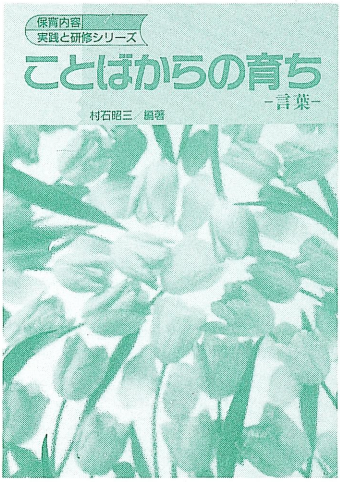
お茶の水女子大学
平成
-3.4.10
受贈
附属図書館

第90巻　第５号　日本幼稚園協会

保育内容　実践と研修シリーズ

ことばからの育ち

―言葉―



新しい幼稚園教育要領をふまえた、今一番新しい実践を紹介、これからの幼児教育に必携の図書。

・新しい教育要領の精神を実践の場でどう消化するかという保育者にとって今一番関心のある課題に答えるシリーズの第一弾です。
・教育要領の文言の解説から一歩すすめ、現場の具体例で、『ことば』と子どもの育ちの関係その育てのあり方を示します。
・幼児から大人へ至るまでの日本人の言葉といった広い視野からの『ことば』についての展開を含みます。

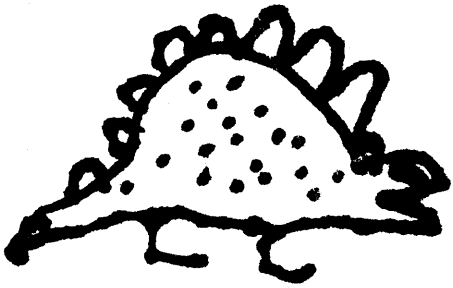
村石昭三　編著

B5判　208頁　定価1,800円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育



第90巻　第５号

幼児の教育

目次

——第九十巻　第五号——

写真・子供讃歌……（4）

〈巻頭言〉　創造性を培う……藤田　復生……（6）

積み重ねられた日々の中で考える

Sくんが十七歳になったいま……津守　真……（8）

子育てをめぐる夫婦トーキング……鈴木　洋・鈴木みゆき……（14）

附属幼稚園の教育(2)　五月……村石　京……（22）

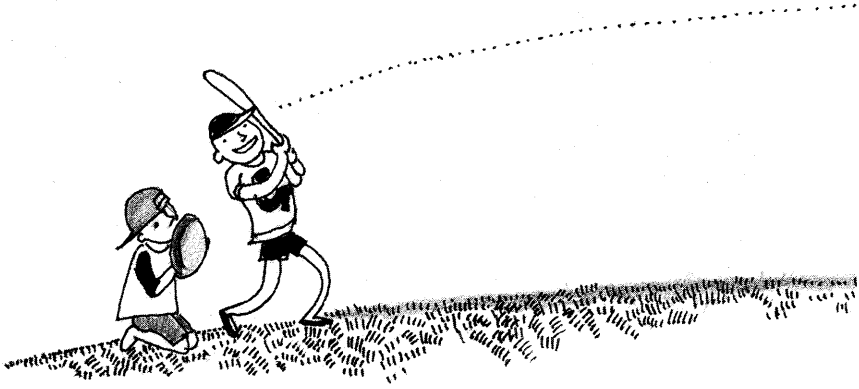
幼児虐待を考える(1)

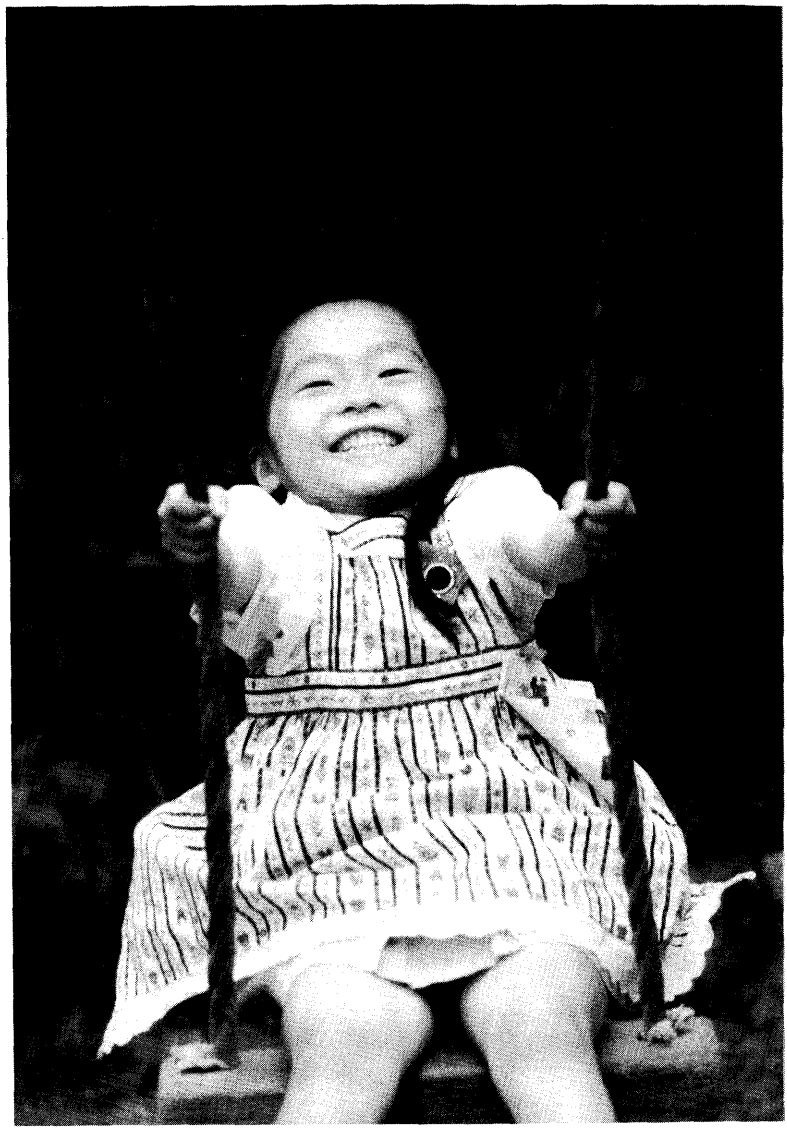
メディアとしての「児童虐待」……K・M・H……（26）

© 1991
日本幼稚園協会

園庭より(11)　温泉……松井　とし…（32）
家庭での生活から……伊集院理子…（34）
保育園での個人用おもちゃ……山口　陽子…（38）
保育者養成の今日的課題(3)
少子化傾向を中心として　チーム観察法の開発……前田あけみ…（43）
ある日の育児日記から(5)……佐藤　和代…（54）
若いお母さんたちへ
逆子がくれたもの……河合　聡子…（55）

表紙版画・樫村　文夫／扉題字・堀合　文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・福田　理恵
編集委員・本田　和子／豊田　一秀・吉岡　晶子
編集部・大沢　啓子





仰ぎ見よ、空を。
驚くことは、我等が
空を見ることの甚だ
稀なることである。
さらに驚くことは、
その稀に見る空の世
界の高く、広く、明
るいことである。

倉橋惣三
『幼稚園雑草』より

撮影・平野　清

〈巻頭言〉

創造性を培う

藤田　復生

天地創造以来、創造を受け継ぐべき宿命を持ったのが人間で、それ故に創造性を持ち常に新しい文化の創造を目指しているのが人間なのです。従って子どもたちも、その能力と可能性を受け継いでいるのです。

ところが、この可能性は育て方によっては消えて失われてしまうこともあるので、私ども保育に携わる者は、どのように育てるかということに、常に心をくだいていなくてはなりません。毎日の生活のなかで感性を大切にして、幼児の夢想する内面生活を豊かに営むようにとファンタジーとイマジネーションを没知性的でない感覚を重視した環境の中で育ててこそ創造的な発想となり表現となると思って居ります。

創造とは、つくり出し、生み出す表現活動だからです。このような子どもを育てるのにロジャースという学者は、三つの条件を挙げています。

一、柔軟な性格。

二、自主的な性格。

三、心理的に安定と自由が保障された状態。

柔軟な性格を養うには、子どもたちの日常生活が解放されていて、その中で受容性に富んだ閉ざされない心を育てなければなりません。固定化しない虚心担懐な心を持つように育てたいものです。又、感受性の豊かさということも必要です。感受性とは、周囲の物事に常に驚きと感動する心の表れで、真実に対しても、美に対しても驚きの心を失わず、更に

探究心を持つようになってほしいのです。このような驚きの心を持つ子どもは、何かを見出す力を持つ子どもになるでしょう。

次に、自主性がなければ創造は生まれません。個性を常に発揮する子どもは主体性も強くあまり同調的ではありません。

幼稚園は集団の場ですし、人間社会も集団社会ですが、その中でいつもいつも同調してばかり居たのでは、自己を喪失して人の言うなり、世の流れに流され通しで自己実現の場を失ってしまいます。

自主性を育てるのには、独りで物事をやる、独りで物を考えるというように、独りの場も必要なのです。この点が大切で、集団社会の一人になるのだから何でも人と同じように、先生や親の言うことは何でも素直に聞き、人と円満にと協調ばかり強いられてはならないのです。

又、冒険心を持たせることも必要です。臆病で、引っ込み思案、安全第一の考え方では創造の可能性は少ないのです。型破り、冒険心は自主的な具体的な表れで、わからない道を探ってでも進み、その変化に対応できることが大切です。

三番目の、心理的な安定と自由の保障ということは、その環境が問題なので、子どもの周囲の雰囲気や大人の心づかいが大切です。先ず、自信を持たせることで、徒らにけなしたり、駄目だといってばかりいたのではいじけた子になってしまいます。良い点を見つけてほめてやり、成功感を味わわせるようにしてやれば、どんな子でも自信を持ってくるものです。常に、圧迫感や恐れのある場でいつもびくびくしていては、創造性は生まれません。

許容的な雰囲気の中にいる子は、のびのびしていますし、いつも目を輝かせて前向きの姿勢を持ち、何かに向かって生き生き活動しています。

（ゆかり文化幼稚園）

積み重ねられた日々の中で考える

――Sくんが十七歳になったいま――

津守　真

十七歳のSくんの父親が、額装した美しい刺繍を幾つも持ってきて見せてくれた。自分でデザインを考え、十数種の色糸を使った精巧な作品である。養護学校高等部から帰ると毎日一時間位ミシンの前に座り何日もかけて作るのだという。ミシンを使う仕事をしている父親にも、最初はどんな風になるのか見当がつかないが、そのうちに驚くようなものができている。布の四周には一定の幅で縫いしろの空間が残されている。行によってデザインが違うのに、糸の終わりが一定の位置に揃っているのは、はじめから糸の長さの見当をつけて切っているらしい。空間全体が把握されている。

私がSくんに保育の場で出会ったのは、この子どもが七歳の時である。幼児期の一番大

変な時期を過ぎた後で、そのころ両親は私に次のようなことを話してくれた。

Sくんはごく小さいときから外に出るのが好きで、父親か母親がついて三時間も四時間も道路を歩き、家に帰るや座る間もなくまた外にゆきたいという。こんな日が何か月もつづくと、こんどは家の中にばかりいて外出しない日が何か月もつづく。そういうときに親が何かしなければと思うと大変で、それでいいと思ってしまえると楽になる。外出したときに卵を三十個も買ってきて、家に帰ると全部割ってしまう。しばらくたつうちに、テレビの料理の番組をその通りにやろうとしていることが分かってきた。この頃は段ボールを集めていて、それを修繕するのにガムテープを一日に何十本も使ってしまうのだという。

私がSくんを保育しはじめたのはこんな時だった。

＊　＊

最初の保育の一日

七歳のSくんは庭の真中に新しい絵の具のびんを五色並べ、ふたをあけたりしめたりしていた。私はそれに心をひかれて傍にいった。しばらく私は傍にいたが、水と筆を持ってゆけば絵をかくだろうと考えてコップに水をいれて傍においた。Sくんはすぐにコップを手にとり、水を口にふくんで私に吹きかけた。思いがけないことで私が逃げると追いかけてきて何度も水を吹きかけた。私もSくんに水を吹きかけ互いにふざけ合った。

私がバケツに水をいれて持ってくると、Sくんは絵の具のびんを全部バケツの水の中に漬けてしまった。そうしてびんのラベルをはがした。絵の具は筆につけて描くものとしか考えていなかった私は、ラベルをはがすという発想に驚かされた。Sくんははがすことが好きなだけでなく、はがしたラベルをきれいに並べて眺める。全部ラベルをはがすと彼はびんのふたをあけ両手にかかえて室内に持っていった。

それからSくんは黄色の絵の具を筆にたっぷりつけ、ポタポタしたたらせて奥の部屋との境の衝立まで持ってゆき、片隅を少し塗り、途中で止めて、衝立の真中に一本の垂直線を描いた。

幼稚部の保育室の片隅に観察室を改造した中二階がある。二畳位の小部屋で三段程の階段があり、子どもたちが喜ぶ空間である。Sくんはそこの壁に絵の具をしたたらせながら帯のように水平線をかいた。そこに電気の中継コードを見つけ、それを壁におさえつけ、「クギ」と言うので私はガムテープを持ってきた。Sくんはそれを手で裂いてコードを貼りつけられる長さに切り、中継コードを周囲の壁に張りめぐらした。彼の手によって空間が作りかえられた。

このSくんの保育の最初の日を見直すと、十年後のこの子どもの行為の仕方の原型が見られるように思う。これにつづく日々に、家庭でも学校でも保育者は新たな状況のもとに同じ問いの前に立たされ、その日々が積み重ねられて十年後が形成されている。最初の日

は後日と関連しているが、将来像が先にあって先立つ日々があるのではない。

途中で止める

絵の具で塗るとき途中で止めるのは何故なのか、最初の日の疑問は何年もつづいた。Sくんが五年生になったとき、数人の子どもと先生と机を囲んで刺繍をしているところに私は居合わせた。Sくんは手本の通りではなく自分で考えた線を刺していた。私はこの子どもが自分でデザインを考えていることに感心したが、それも完成させずに途中で止めていた。そのときはじめて私はこの子がそのつづきをどのようにしようかと考えているのだろうと気付いた。途中で止めて他のことをしているうちに良い考えを思いつくことは、私共の生活にしばしばある。創造的な仕事に必要なステップである。衝立の色塗りを途中で止めたとき、外見はよくなくとも、全部塗るようにと言わないでよかったと私は思った。

中学校に進学したとき、刺繍の時間に黒い糸を一本しか渡されなかったSくんは、先生の机の上から何色もの糸を取ってきた。彼は勝手なことをした罰として校庭を何周か走らされた。そういうときのSくんは素直で、弁解することもしない。先生の理解を得るのには、母親が何度も話をしに学校にゆかねばならなかった。

いまも一枚の刺繍を作るのにSくんは何日もかけてつづきをしている。

大きな物を動かす

Sくんの行為でもうひとつ顕著なことは自分の空間を思うように作りかえることである。彼はしばしば部屋の中の家具を移動させた。机、本箱、食器棚、ロッカー、壁掛時計など、学校の中でも大きな物をひきずって位置をかえた。そのときには大人は困らされることが多い。Sくんが家で自分の小さな部屋を持つようになったとき、何百と蒐集しているお菓子の箱や缶を何度も並べかえ、空間を作りかえた。

最初の保育の日に衝立や壁に垂直線や水平線を描いたのも、空間の配置を確かめていたのかもしれない。刺繍を刺して布の四周の縫いしろを残しておくのも、こうして大きな空間を作りかえる経験を積んでいることと関連があるだろう。

父親が刺繍を持ってきてくれたとき、幼いときは毎日外を歩いて大変だったけれど、無駄なことは何ひとつなかったということがいまになって分かります、と述懐された。町を毎日歩いたから、付近の地理はわたしよりも詳しいと言って笑った。箱の蒐集に長年興味を持ってきたSくんは、いま日本の白地図を描いて各地の地酒の銘柄を書きこむことに熱中している。縫いしろの空間だけでなく、もっと大きな空間の感覚が彼の身体の中にはあるらしい。

この子どもの作品を見るとだれもが感心するのだが、より良い作品を作るためにこの子の生活があるのではない。いつもまだ形にならないものを沢山かかえて、それを楽しんでいる。先日私共の学校にきたときにも、Sくんは床一杯に新聞や広告をひろげて座りこ

み、地酒の小さな広告を見つけて切り抜いていた。

十年前の私との出会いの最初の頃は、私には戸惑うことの連続だった。いまは迷うことは減り、本人も周囲の人も自信を持って過ごしているが、未知な未来をかかえていることにおいてはかわらない。十年後の現在が過去において目標だったわけではない。過去と現在は因果関係によっては結ばれない。人間の発達についての省察は、子どもにも大人にも、日々生活が進行する中でなされる。

（愛育養護学校）

子育てをめぐる夫婦トーキング

鈴木　洋・鈴木みゆき

1　はじめに

私達は、昨年七月下町風情ののこる墨田区に、小児科・内科の鈴木こどもクリニックを開院致しました。院長は、約十年、東京港区の母子愛育会総合母子保健センター愛育病院に勤務し、小児科医療（特に、新生児、小児神経、小児保健）にたずさわってきました。妻は、短大で保育学を教えるかたわら、乳幼児の発達と遊びを研究し、絵本や遊びうたを創作しています。私達の間には小学三年生の長女、五歳の次女、三歳の長男、と三人の子どもがいます。お互いに、子育ての実践――子どもとのふれあい――を通し、又、現実の医療経験とあわせて地域に根ざした小児科医院をめざしています。更に、本来医院は、非

日常的で暗くかた苦しくなりがちな所でありますが、私達は、地域の母親、子ども双方が楽しめ、気軽に交流できる場として待合室を子ども文庫（ぞうさん文庫）として解放しています。病気で受診した子どもたちはもちろんのこと、週一回、元保母である医療事務のお姉さんが、休診時間を利用し、絵本の読みきかせや人形劇をおこなっています。

開院して約半年、最近の子育てや子どもの問題を夫婦で話しあってみました。

2 乳児（二歳以下）

院　長　子どもといっても幅があるからね。年齢的に区切って話してみよう。

まずは、乳児（二歳以下）の子どもの問題から。

みゆき　とにかく情報がすごいということ、それにお母さん達がかなりふりまわされているなぁと実感しています。

院　長　医療も同じで、病気の知識が先行し、何でもないのに、お母さんが不安になっていることが多い。この傾向は、愛育でもここ墨田区でも同じだね。

乳児は、保健所からの健診も多いし、来院する回数も多いから、実際の病気でなく不安のため来るお母さんが目につくんだよね。

みゆき　そうね。私が育児相談をしている都内のデパートでも、ほとんどが二歳未満のお母さん達だわ。お母さん達が不安が強いのは、情報過多もあると思うけど。

院　長　そうだね。情報が多すぎてお母さん自身が消化しきれない感じかな。でも情報を与える側は無差別、無節操に流している気がするよね。それと、ここ下町は、おじいちゃんおばあちゃんと同居したり近くにいたりして、祖

父母側からの情報が更にお母さんを混乱させている所があるよ（笑）。おばあちゃん達が育児をしたのは三十年前なんだよ。三十年前と今とは子どもを取り巻く状況が違う。例えば今は、先天性疾患をのぞき、乳児の死亡はめったにないし、赤ちゃんの栄養状態も、生活環境も良いので病気にかかりにくいんだ。又、経済的な余裕（時間も含め）や医療知識の普及もあって早く病院を訪れるため、重症な子どもは少なくなっているんだ。それにひきかえ三十年前はそうでもなかったから、おばあちゃんが不安をあおっている気がする。健康な子どもが肺炎になったからといって死ぬような時代じゃないと僕は思う。

みゆき　よくお母さん達がオロオロしていると、核家族化して、側に頼れるおばあちゃんがいないからだと言う人がいるでしょう？　でも今の話だとだいぶ違ってくるわね。確かに、おばあちゃん自身が二人前後しか育てていない訳ですものね。

院長　僕は、今のお母さんはよくやっていると思うし、健診の場でも、自信をもって今後も同じようにやるように言っているんだ。ここだけの話だけど、特に、不安を与える専門家と称する人々や、お母さんの育児を否定的にみる人々は、実際の子育てに関わらなかった男の医者や、子育ての経験の無い人が多いと思う。要するに育児を頭の中で考えている人達ってことだ。

みゆき　あなたは、実際三人の子育てを担ってきた有能な〝子守り（こもり）のオジチャマ（!?）〟だものね（笑）。

院長　育児は、数学の問題をとくようなかた苦しいものではなく、もっとあいまいな――言わゆるファジイ――なものなんだよ。

みゆき　そうね。私も育児書なるものをずいぶん読ん

だけれど、一般化して書いてあるってことは、個々の幅や深みへの突っこみが足りない気がして気になったわ。あなたが言う〝専門家〟たちが、どれ程自分の子どもの（もちろん他人の子どもでも）夜泣きや発熱につきあったのかなって思ったりもしたわ。

院　長　夜泣きは、たまらないよね。夜、子どもが泣くと誰が受けとめるかが問題だったね（笑）。お互いの根比べで、目覚めていながら起きたら負け（笑）みたいにじっとしててサ、ついに子どもがあきらめて泣きやんでしまったこともあったっけ。夜泣きは、子どもの成長にともなうできごとで病的なことではなく、聞かされる大人の問題なんだよ。

みゆき　アメリカの育児書に「夜泣きの頃」はないからね。寝室が別だからでしょ。

院　長　発熱に関しても、赤ちゃんが三日も熱が続けば、医者だって不安になるんだよ。赤ちゃんの最初の熱は、風邪や突発性発疹が大部分なんだ。一応重症の病気の所見はないと診察しても、三日続けば、お母さんも不安になるし、医者も不安になるもんなんだ。四日めに熱が下がって発疹がでてくると手をとりあって喜んだりするんだ（笑）。

みゆき　けっこう気が小さいんだ（笑）。そうそう、育児相談で「あやし方、遊び方を教えてください」というのもふえているわね。昔遊んでいても忘れているし、成人してから小さい子と遊ぶ経験も少ないものね。

院　長　君はそういう情報をよく知っているし、オリジナルのものも作っている（日本コロムビア4/21CD発売・赤ちゃんとの遊びうたです）。ボクなんかまだまだよくわからないから今後もっと勉強していかなきゃと思ってる。

みゆき　幼児をもつお母さんの会に行って、一緒にう

たったり踊ったりすると実に上手なの。完ぺきに恥を捨てている（笑）。

これは、最初赤ちゃんをあやすのが恥ずかしくても、赤ちゃんとのやりとりの中で育てられてくるのだと思う。育児って子どもから育てられる部分がたくさんあることを感じるわ。

院　長　育児の主役は、お父さんお母さんとその子ども達で〝専門家〟は黒子に徹するべきだと思うね。今は〝主役〟の育児専門家が多すぎる気がするよ。

では次に幼児をめぐる問題について。

3　幼児（二歳～就学前）

院　長　幼児は、集団生活にかかわるもろもろの病気が多いなぁ。まず、幼・保に入って一年めに風邪をよくひく子がいて、親から「家（うち）の子は、体が弱いのでしょうか？」と質問されるけど、あたり前のことなんだよね。多くの子どもと知りあうのと同時に多くのウィルスとも知りあうんだからね（笑）。その結果風邪をひく訳です。ハイ。

みゆき　保育の面からみると、確かに親が子どもに手をかけて育てている反面、子どもができることまで親がやってしまっている場面によく出会うわ。

院　長　診察していると、この位の子は外と内の区別がつかない子もいるよね。親はほめる時はほめ、叱る時はきちんと叱った方が良いと思うけどね。やはり子どもは他人の私から言われるより親からきちんと注意された方がいいと思うし。

みゆき　でも、親が怒る時に「ほら、おじちゃんに叱られますよ」と他人を引きあいにだすこと、けっこうあるわョ（笑）。

院　長　我が家は、両親のバランスを上手に利用され

てるよね。叱られると叱ってない方にスッとよりそったりしてサ。

みゆき　三人いるとおもしろいわね。私は鬼ババのように言われたりもするけど、人と物を大切にする子になってほしいと思っています。

院　長　この時期の子どもに幼児教育という言葉を使うのはなぜ？

みゆき　子どもの生活は遊びなのにね。

院　長　今、早期知的教育が大はやりで親も情報を仕入れてきては右往左往している。いろいろな人がいろいろな勝手なことを言っている状況は、ガンやアレルギーの病気の治療と同じような気がする。ようするに、学問的にまだ体系化されていない状況の時は、いろいろな人が勝手なことを無責任に言うんだよね。

みゆき　おけいこごとから学習塾まで一週間スケジュールがタレントなみにつまっていて、幼稚園は気ばらしに行っている子どももいる位よ。

院　長　例えば、大人になって国際的なバイオリニストになれたからといって誰もが〇歳から始めれば必ずそうなるとは限らないのにね。

みゆき　その子がどういう大人になってほしいのかではなく、「小学校に行って困らないように」という理由を聞くと驚くわね。

院　長　親のビジョンはかまわないけど、ここでも周囲の〝専門家〟が誇大広告であおっているのはよくないね。

みゆき　もう一つ、塾がはやるのは、子どもにとって遊び場が少ないせいでもあると思うの。特に都会は、交通や様々な事件の影響もあって、子ども同士が野原や道端で遊べるチャンスが少ないのよね。

院　長　我が家の近くの荒川河川敷には、野球場があるけど、日曜日には、大人の男性だけが野球

をしていて、家族は一体何をしているのかなって思うね。

みゆき　家族そろって遊べる場は、お金のはる××ランドや△△センターになっちゃうのよね。

院　長　公的な機関が、もっと子どもの日常的な遊びを保障していかないとダメだよね。選挙権のない子どものことは、政治家は考えないのかな（笑）。

みゆき　ここで野球をする男性の話がでたついでに、お父さんの問題を！

4　もっと男性も子育てを

院　長　家父長制をそのままひきずっているお父さんもいるけれど、最近は、育児に積極的なお父さんもふえているんですよ。共働き夫婦がふえているからかもしれないけれど、子どもが病気になると交代で子どもをつれてくる家庭も少しだけどあるからね。

みゆき　育児の時期にもよるのでは？　子どもが赤ちゃんの頃はまだそんなにお父さんも忙しくないけど、幼児期になるとほとんど家にいなかったり……しない？

院　長　今はまだつれてきてくれるだけで良しと思っているんだ。だって発熱で受診しても、「いつから、どの程度の熱か、他にどういう症状があるか」聞いても答えられないからね（笑）。ましてやこれまでかかった病気なんて全く知らない。

みゆき　お母さんがお父さんに、子どもと一緒に病院に行くことを要求できるようになってきたとも考えられるわね。

院　長　今、男女差別の問題を社会でとりあげられ少しずつ改善されてはきているけれど、基本は家庭の子育てから始まるんじゃないかな。男の子は男の子として育てられる背景が変わらないかぎり男女差別はなくならない。男の子

は父親の姿をみて、役割を学んでいったりするからね。

みゆき　女子短大生に育児意識を聞くと、とても保守的で時代の変化を感じさせない部分と、〝好きだった主人公〟が常に、元気一杯の女の子（例えば長くつ下のピッピやポリアンナ）だったりして、揺れている気がするわ。育てられた環境とこれからつくっていく環境のギャップかなあ。

院　長　まあ、全体としては、日本の小児医療のすすんできた道は肯定できると思うよ。マイナス面としては〝専門家〟志向に走ったり、無駄な検査や脅す育児を展開したりすることもあるけどね。でもこれからは、男女力をあわせて、未来に希望をもてる子育てをしていってほしいね。

みゆき　私も、子どもの敵にならない仕事、脅す育児ではなく元気づける育児をめざしていきたいわ。

院　長　初めに不安を与え、「××にならなくてよかったね」と恩きせがましく言ったり、正常範囲内の問題を異常として指導し数年後、はっきりした〝正常〟な子に、あたかも指導がよかったかのように専門家がいうのは詐欺に等しいね。ボーダーラインと称するもののほとんどは、もともと正常の子が多いんだからね。

みゆき　子どもに関わる多くの人に、それを認識してほしいわね。

＊夫婦共著『はじめての赤ちゃん』（マンガ育児書、主婦と生活社・一九九〇年三月刊）

（鈴木こどもクリニック院長）
（小田原女子短大講師）

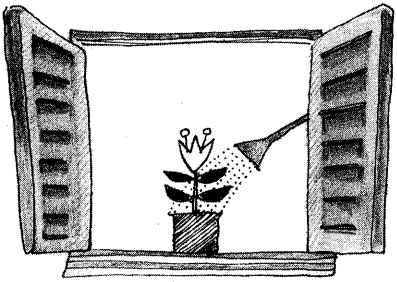
附属幼稚園の教育(2)　五月

村石　京

五月の保育とねらい

附属幼稚園では、保育室も園庭も、五月のさわやかな空のように子どもも教師もともに心も身体ものびやかで自由でありたいとのぞんでいます。日々の保育の中では、子どもたちに種々な要求を出して子どもたちを制約することなく、子どもたちの生活の中に明るいのびのびした空気の満ち満ちた生活を送りたいと願っています。

新入園児たちも少しずつ園の生活になれてきて、自分を出せるようになったり、表情にかたさがとれて明るくなごんできたりしています。遊びも四月の入園当初のそっと遊具に触れて遊ぶといった様子から一歩進んで、遊具を媒介にして淡いながらも友だちとのつながりも徐々に見えてく



る時期です。

勿論まだ園の生活になじめないでいる子どもや、母親と離れにくい子どもも数人見られたりします。これは子どもが皆一律でないと思えば、当然のこととして受けとめることが出来るでしょう。無理に母子分離を急いだりしないで、子どもが保育者の方に自然と気持ちを向けてくれるようになるまで、努力しながらもあせらずに見守っていきたいと考えています。子どもたちの様子を見ながら保育時間を少しずつ延ばしていったり、この月から三歳児は週一回程度のおべんとうの日を設けたり、四歳児は週二回、五歳児は週三回おべんとうをと、年齢によっての保育時間を考え、子どもの体力と合わせながら無理なく園生活のリズムが身につくようにと配慮しています。

新入の大部分の子どもたちはこの一か月の間に、いろいろなことに興味を示し、随分活気が出て来ました。元気がありすぎてはめをはずしてしまう子どもや、帰りの時間になっても帰らないといってがんばる子どももいたりもします。子どものこうした行動があると、担任としては早くぬけ出したいと悩むことも多いのですが、困ったことと頭をかかえるのではなく、こうした行動も一つには自分を出せるようになったことの現れですから、元気になっていろいろな面を見せてくれるようになったのだととらえるようにしたいと思います。お母さんから離れにくくて泣いている子どもも、帰りたくないと言って駄々をこねている子どもも、やがて保育者との間に大きな信頼関係が育つ頃には、それは自然と解決出来ることなのですから。

また、この月位から保育者への子どもたちの要求がとても多くなってくるようです。はじめは自分のしてほしいこともなかなか言葉に出せずにいて、保育者の側から察していかなくてはならなかったのに、今は自分のいろいろな要求を教師に

ぶつけてくるようになりました。「やって」「やって」と次々と言われて保育者は目のまわるような忙しさです。また、ある子どもと手をつなげば、もう一本の手をつなごうと他の二～三人が競い合って、こちらは思わず嬉しいひめいとなることさえあります。子どもたちが少しずつ教師の存在を意識するようになってきたからなのでしょうか。保育者の存在を子どもたちが、自分の要求を満たしてくれる人という安心感をもって受けとめてくれたなら、とても嬉しいことだと思います。あるいは子どもたちは無意識の中に、保育者のことを自分の方に心を向けてくれる人だろうか、自分のことをわかってくれる人だろうかとはかっているのでしょうか。出来ることでも場合によっては甘えて、やってもらうことによって、保育者とのかかわりを求めていることもあると思います。この頃の「やって」に対しては早く自立出来るようにとうながすのではなくて、安心して子どもが飛び込める存在となるように、暖かい大きな心で受けとめていくことが大切だと考えています。

私どもは、幼児期は早く一人前の人間として自立するための時期としてあるのではなくて、周囲の大きな愛情に包まれながら心豊かな人間として育ち、人に対する信頼を築いていく大切な時期であると考えています。そのため園生活の中においても、保育者は家族の中のお母さんと同じように子どもを全面的に受け入れ、子どもの気持ちを理解し、子どもの要求をかなえ、子どもからは大きな信頼を得たいと願っています。そうはいっても勿論幼稚園は集団生活の場ですから、全部が全部というわけにはいかないこともあります。人に迷惑をかけたり、乱暴な行為がいけないことはわかってもらいたいと思いますし、止めなければならない場合もあるでしょう。子どもの勝手気ままを許すのと、子どもの思いを充分満たしてあげることの大切さとの違いを、保育者はよくわかって

いかなくてはならないと思います。

そのためには一人ひとりの子どもをよく知ることが最も肝要となると思います。一人ひとりの子どもを大切にする保育とはよく言われますが、その原点は一人ひとりの子どもをよく知ること、子どもの今のぞんでいることを理解し、その子どもの要求に応えていくことからはじめられると思います。それが子どもとの信頼関係のきずなをつくる第一歩であり、子どもも自分のことをわかってくれる人、自分のことを認めてくれる人に対して心を開いていくのです。

保育者自身、自分はこういう級をつくりたいとか、こういう学級運営をしたいという考えは当然持っていると思いますが、保育者が級の中心的存在ではなくて、あくまでも子どもが中心なのです。保育者がある程度の存在感を持っているのはやむを得ないとしても、心がまえとしては保育者は学級の中の一員として子どもとともにあるという気持ちを持ち、子どもを中心とした日々を送るための基礎がための月となるように、子どもたちを支えていきたいと考えています。この時期の保育者の課題としては「子どもの要求に出来るだけ応えること」「子どもに誠実に対応していくこと」などとなるでしょう。そして新入園児は「元気に登園し、楽しく過ごせるように」年長組の子どもたちはそれに加えて、「友だちと一緒にいろいろな遊びを楽しむことが出来るように」などがポイントとなるのではないでしょうか。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

幼児虐待を考える (1)

メディアとしての「児童虐待」

K・M・H

子どもが危機的状況にあると憂えられ、彼らの人権が謳い上げられる。そして、その所産としてメディアに浮上し、人々の耳目を脅かすのが、「児童虐待」という情報……。子どもたちを暴力から護ろう、早期発見と早期対応、そのためのシステムの確立をと、関係者たちは活気づくのだ。

最近の児童相談所が扱う事例には、「児童虐待」の通告に基づくものが増え続けていると言う。ところで、一体、どのような事態を「虐待」とみなすかについては、現在、次のような定義に依拠しているらしい。すなわち、①身体的暴行、②保護の怠慢・拒否、③性的暴行、④心理的虐待、さらに、⑤棄児・置き去り、⑥保護者による家への閉じこめ、などが付加されているということだ。

とすれば、一目瞭然の棄児の場合は別として、それ以外は、誰か第三者が、ある状況を「虐待」

と把えて通告してくることになる。どこそこの親は、子どもに暴力を振っているらしい、満足に食べさせてもいないようだ、あるいは、誰それの子どもはいつも青アザが絶えない、などのように……。児童相談所の扱う事例が増えたとは、こうした通告が増えたということだろうし、それだけ他人の親子関係に関心が向いているということかも知れない。何しろ、虐待を加えている本人が通告してくることは、ほぼ絶対に考えられないのだから。

育児不安や家族の崩壊、それに、親になるには未成熟すぎる大人たちの増大もあって、いわゆる常態とはみなし難い親子関係が目立つことは確かかも知れない。しかし、それらが、マメに通告されるとは、考えてみれば不思議な現象ではないだろうか。何故なら、人々が自己の世界だけに閉じこもって、他人への関心を失い、結果として近隣の相互関係が失われて地域社会が解体したとは、くり返し主張されて定説化している言説だからである。近隣関係の消滅と反比例する近隣への関心……。これが物語るものを、一体、どう考えることが出来るのだろう。

◇

子どもが生命の危機にさらされるという現象は、様々なかたちで、歴史のなかに出現し、その都度、人々の耳目を驚かしてきた。たとえば戦争、たとえば疫病の大流行、あるいは大飢饉……。そして、とりわけ、子どもに関係の深いのは、中絶や間引きなど、誕生以前の、もしくは誕生直後の子殺しの例であろう。私どもは、江戸時代末期に、くり返し出された間引き禁止の通達や、子育ての奨励書を読む機会を持っている。それらは、言葉を尽くして語っていた。生まれた子どもを殺すこと、あるいは未生以前にその生命を

抹殺することがいかに非道であるか、と……。

この時代に、子殺し関係の言説が活発化したことをめぐっては、既に幾つかの解釈が試みられている。それらを整理するなら、大別して、次のような二つの見解を抽出することが可能だろう。すなわち、「子どもの発見」などと命名されている子ども観の革新が、その一つ。未成熟な身体を精神が「小型の大人」のそれでなく、「保護」と「教育」に値する「子ども」そういうカテゴリーに属するものであること、そして、「子ども」なるものの始まりは、誕生以前の胎児の時にしるしづけられることなど、子どもをめぐる新しいまなざしが、子殺しを忌避し、それを咎める方向へ動いたのは当然と言うべきだろう。未だ「人ではない」もののように無雑作に扱われていた生命への、改めての注視……。

そして、いま一つは、農村人口の減少に伴う、為政者たちの人口政策であったとされる。都市の発生、市場経済の進展が農村人口の流出を促す。農業経済に基盤を置き、農村共同体に支えられた幕藩体制にとって、それは、看過し得ぬ危険な動向であった。子どもを産み、それぞれの家で丁寧

に育てること、そして家業を見習わせ、家の後継者を養成すること、それに加えて、労働力として家をささえる第二子、第三子も重要である、ということであれば、子殺しの禁止と子育ての奨励が、俄かに為政者たちの視野に緊急事項として浮かび上ってきても不思議はない。

と、こう考えるなら、幕末に活発化した子殺しをめぐる言説は、「子殺し」という現象そのものの増大を示すにまして、それらに寄せられた「まなざし」の変化を物語るものと言い得よう。子どもは古くから間引かれることもあったし、中絶されることもあり、棄てられることもあったろう。しかし、それが、特別に注目に値し、論じるに値することとしてメディアに浮上してきたのが、この時代だったということだ。

◇

最近、メディアの上で目立ってきた「児童虐待」をめぐる言説を、江戸末期のこれらの動きと、重ね合わせて考えることは容易だろう。たとえば、このところ、しばしば話題とされる「子どもの人権」の問題は、かつての時代の「子ども発見」の歴史と、そして、出生率の低下への配慮は、農村人口減少対策のそれと……。子どもの人権が注視され、少子化傾向が憂えられるとき、子どもらが置かれている危機的状況が、常にもまして肥大化して見えてくるものだ。

人権問題は、国連総会で採択された『子どもの権利条約』と、その批准をめぐる国際的・国内的な動向と無縁ではない。周知のように、国際連合が、「児童が、幸福な生活を送り、かつ、自己と社会の福利のためにこの宣言に掲げる権利と自由を享有することができるように」と、『児童権利宣言』を採択したのが、一九五九年十一月二十日であった。そして、その三十周年に当たる一九八

九年十一月二十日、かつての権利宣言をより具体化し、かつ、加盟国に対しての法的拘束力を強化するため、改めて採択されたのがこの「条約」であった。

そこには、「経済的搾取・有害労働からの保護」「誘拐・売買・取引の防止」「死刑・拷問等の禁止」、あるいは「武力紛争における子どもの保護」など、開発途上国や紛争地域に顕著な問題も盛り込まれていて、広く世界的視野での児童問題が把握されていることは歴然である。従って、家庭や学校での暴力行為や、いじめの問題などとのみ結び付けられがちなわが国の場合などは、やはり一つの偏向の例と考えておくべきだろう。もちろん、身近な問題に積極的な関心を寄せ、危機にさらされている子どもたちに援助の手を差しのべることの重要性は言うまでもないが、「子どもの人権」という硬質な概念が、人々の無意識を攪拌して、周囲の親子を見るまなざしをギクシャクと厳しいものにするとしたら……。暴力を振るう親や教師をたしなめたり、戸のしまった家の前で寒がっている子どもを、一寸の間自分の家に誘い込んで温まらせてやったりする。そうしたさり気ない行為を忘れて、すぐに通告という手段が取られがちだとすれば、そのことを、私どもは、どう考えるべきなのだろうか。

それに、新しい『子どもの権利条約』は、何よりも先ず、子どもの主体性を主張している。わが国の『児童憲章』が、「児童は人として尊ばれる」という有名な一文に象徴されるように、受動態の文章を多用して無意識のうちに子どもを受け身の存在に追いやっていたのに比すとき、明白なちがいがここにあるとされている。たとえば、「権利条約」は次のように謳い上げるのだ。「子どもは表現の自由への権利を有する」、「いかなる子どもも、プライバシー、家族、住居または通信を恣意的にまたは不法に干渉されず、かつ、名誉お

よび信用を不法に攻撃されない」と……。とすれば、親子間に生じたことを、第三者が「虐待」と判断し、そこに介入することはプライバシーへの干渉にならないのか、否か。

私どもが、「人権」という美名のもとに、安易によりかかろうとしている「条約」は、このくらい厳しく、底の深いものだ。幾分大げさに言えば、「子ども観」「親子観」の変革を要請されてさえいる。それらをふまえた上で、「子どもの危機」に対する扱いを熟慮せねばならないということだ。新しい「条約」が謳い上げているような、緊急に満ちた子どもと大人の関係が出来上がったとき、子どもらの問題はどのような装いを取り、メディアは何を主題化するだろうか。

出生率の低下をめぐる言説も、恐らく、私どもの子どもを見る眼を変えていきつつあるのだろう。為政者側が慌しく打ち出す保護や育成の措置を、彌縫的にすぎると批判することは容易だろう。しかし、わが国の将来から子どもの姿が消えていくという予想は、私どもを不安がらせ、子どもを見る眼を無意識裡に変えてしまうのだ。それでいて、私どもは、身近にいる他人の子どもたちと、どんな関係を作り出していけばよいかについて、未だ、何も摑まえてはいない。

こうした状況のなかで、新しく起こったり、束の間に消えていったりする子ども論議、そしてメディアでの現れ方に対して、私どもは、どう対処していったらよいのか。それらを、賢いふみ台とするためには……。これから、折にふれて、本誌上をも賑わすことになるだろう「児童の人権」やら「児童の危機」「児童虐待」をめぐる言説に対して、それをどのように読むかということが、さし当たっての課題と言えよう。

園庭より(11)

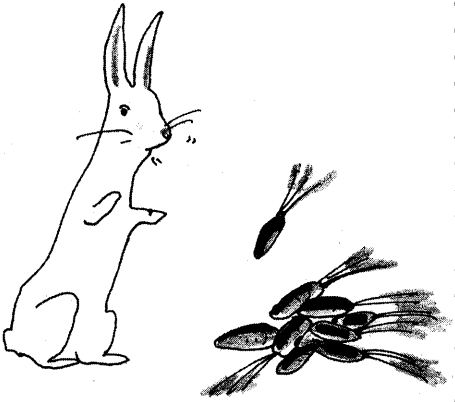
温泉

松井　とし

幼児教育の本質をなす部分は、わき上がってくる高まりではないだろうかと思う。外から見ればとらえどころがないように見える幼児教育にも、教育課程や指導計画が存在する。しかし、それらは大人の計画に子どもをはめこんでいくものであってはならない。

ひと昔前「教師は仕かけ人」ということが言われた。より良い環境を工夫し、子どもを上手にのせながら、着実に計画を実践していく力量を言ったものであろうか。

しかし、子どもたちが大人の予想や既成概念を越えた時、そこに新しい何かがうまれる。そして教師とか子どもとかいった区別なく、真実の共感や、満ち足りたやわらかな心持ちが残る。



いつの頃からだろうか、私は、願っているとまるで導かれるように活動がわき出てくる驚きと楽しみを、体験することができるようになった。日々の生活から、まるで生きるもののように、子どもたちも私にも、心から共感し合えるものがうまれてくるのである。

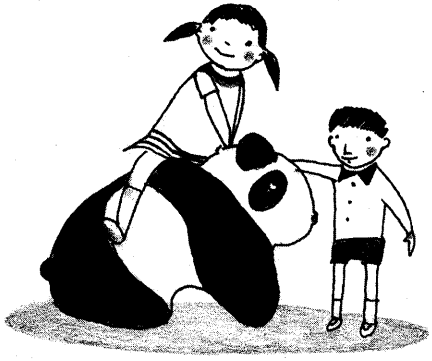
空箱製作をしていたM子が「空とぶうさぎ」を作った。すると他の子どもたちも次々に夢を語り出し、私達はファンタジーの世界に遊んだ。何日か後、園外保育の自然の中での、全く思いがけない体験が重なり合って、「ふしぎな森」というお話ができた。さらにこの話を、年少組の子どもや母親にも見せてあげたい、という気持ちが子どもたちの中にうまれた。お話作りや劇の世界で生き生きする子ども。紙芝居を描く時に楽しそうだった子ども。役割を決めるところで眼が輝いた子ども。それぞれの子どもたちの、内から溢れ出る充実感は、いつも温かくやさしい。それらは子ども同士、そして、私に生きる力を与える。

子どもたちと日々を創る生きがいも、ゆっくり心穏やかに待つことから生まれるようになり、私自信の生活のテンポもゆるやかになった。「温泉」という二字が身近になった。

（神奈川県立教育センター）

家庭での生活から

伊集院　理子



昨年の三月に第二子を出産し、現在は一年の育児休業をいただいて、家庭で時を過ごしています。

横たわってただ泣き声をあげることしかできなかった息子も、今ではどこでもつかまって立ったり、気を引くものが目に入ると瞳を輝かせてものすごい勢いで這っていって、それを掴み、張ったり叩きあわせたり口に入れてみたりと、活発に動き回って物の探求に精を出しています。この世に生を受けて間もない幼な子の毎日は、まさに自らの可能性への飽くなき挑戦の日々です。

身体が少しねじれるようになれば、それを何度も試み、いつの日かはずみでコロッと寝返りが出来るようになります。一度できるようになると、すぐにはうまくできなくても何度も試みて、わずかの間に自分の力にしていきます。固く握りしめて少しも開こうとしなかった手もしだいにほぐれてきて、いつの日か、か弱いながらも握らせると

物を握れるようになります。その握り方が確かになるにしたがって、今度は自分から物に手をのばしてそれを操作しようとします。いかなる時もその時にできる最大限の力を駆使して、運動機能にしろ、手指の操作にしろ、自分の可能性を拡げていきます。精神的、身体的に満たされている時は、一瞬たりとも無為に時を過ごすことなく自分から新しいことに挑んでいくのです。こうした生まれて間もない赤ん坊の全存在をかけて生きる姿、生きようとするエネルギー、生に対するひたむきさには心打たれるものがあります。誰しもこの世に生を受けた時にはそうであったのに、いつからか、人は可能性を自分から縮めてしまうのでしょう。

ふと、幼稚園で出会ったA子のことを思いだしました。入園当初のA子は、友だちのしていることを見て、自分から同じようにやってみようという姿勢が見られました。それまでの経験の少なさからか、製作的なことに対しては要領の悪い所がありましたが、自分なりに取りくもうとしていました。幼稚園での生活にも慣れてくると、自分から何かをしようとする能動性や躍動的な心の動きがあまり見られなくなっていきました。ブランコにのったり、走りまわったりして何となく時を過ごすことが多くなりました。こちらができればみんなに体験してもらいたいと用意することに対しても、おざなりにちょっとやって、「これでいいですか」ともってくることがありました。年長組になってからは、友だち遊びに興じる姿も見られるようになりましたが、ちょっとした友だちとのやりとりでメソメソしてしまって、そこから立ち直るまでとても時間がかかりました。固定してきている友だち関係から一歩外に踏みだしたいという気持ちを持ちながら、自分から殻をつくってしまっているようなところがありました。そんなA子を見つめながら、彼女の自己を存分に生きてい

ないように思えて、歯がゆさと切なさを感じていました。

A子だけではなく、何ものかに心を囚われて、やりたいと思ったことに真っすぐ心を向けられずに、自分をありのままに生きられない子どもたちが多くなってきています。何故なのでしょうか。

色々な事が早期化しているからでしょうか。今の子どもたちの多くは、幼稚園に入る前から、又幼稚園に通いながら、スイミングやスポーツ教室、幼児教育などに通っています。そこでは、きめられていることをやるように指示されます。そして決められたことをいかにこなしたかという、外からの基準で自分の行動をとらわれることを子どもたちは体験します。幼い頃から外からの基準で行動を評価されることを経験することは、子どもが自分なりにありのまま生きることに対して歯どめをかけてしまっているのではないでしょうか。又、親もそこでの評価に一喜一憂して、幼い子どもを叱咤激励するようになっていきます。そして、子どものことをそこでの評価を介入させて見るようになっていきます。一番身近な大人である親がそうなったら、子どもはますますありのままに生きることができなくなってしまいます。

子どもが多くの時間を過ごす家庭生活には問題はないでしょうか。

「早く食べなさい」「早く着がえなさい」「早く片づけなさい」毎日矢継ぎ早に繰り返される指示の言葉の嵐。ゆっくりと流れている子どもの時を、何だかいつも何かに追われているようなせわしない大人の時に無理矢理引きずりこませてはいないでしょうか。親の心づもり一つで生活の節目ともいえる時をもっとゆったりと過ごすこともできるのに、そのことは棚にあげて、「どうしてあなたはやることが遅いの」「なんで言わなければやらないの」などと叱責したりしてしまうのです。我が家でも上の娘に対して毎日繰りひろげら

れる現実です。「言わなければやらない子」にしているのは親自身なのに……。

子どもが思いのままに何かに取りくむ時間が家庭生活の中にどれだけあるでしょうか。家の中には、子どもが興味を持っても触ってはいけない高性能、高品質なものであふれています。集合住宅では、心の高まりからはねたり走ったりするごく自然な子どもの行為も許されません。そういった様々な制約の中で、多くの時間をテレビやビデオの前で過ごすことが当たり前のことになってきています。テレビを見ている時の子どもは、ポカンと口をあけて全ての動きがとまってしまいます。十か月の息子でさえ、鮮やかに繰りひろげられる視覚刺激の前ではピタッと動きがとまってしまうのです。映像に引きずられるままになっている時の子どもは、自分をありのままに生きているとはとてもいえません。

この一年、家庭生活にどっぷりつかりながら、いかに家庭で子どもたちがありのままに生きずらくなっているかを切実に感じてきました。幼児期の子どもの日々は、瞳を輝かして新しいことにどんどん挑戦していく、生まれて間もない赤ん坊の毎日の延長であってほしいと心から願います。再び現場に戻る日が近づいた今、少なくとも幼稚園では、子どもが自分からやりたいことを見つけ、そのことに心を傾け、精一杯取りくむ中で、自分のありのままに生きていく本来の子どもの生活を取り戻すべく、出きる限りの援助をしていかなければいけないと、保育者として生きる重い責任をあらためて感じているところです。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

保育園での個人用おもちゃ

山口　陽子

〈生活発表会で〉

色とりどりに布貼りされた十六個の箱積木がプレイルームに無造作に置かれています。「さあ、自動車に乗ってカレーライス広場に行こう！」の保母の声に、十六人の一歳児たち（この時はみな二歳になっている「一歳児クラス」の子どもたち）が迷うことなく自分の箱積木に、いっせいにまたがって床をけって出発です。テーブルや戸板を組み合わせて坂にした「道路」を走りぬけると、「こんどはみんなでつながって、電車にしようか。」と保母が提案。だれの次に自分の箱積木をつなげるかで、ちょっとはトラブルがあるものの、「（〇〇ちゃんのにつなげても）いいか？」「いいよ。」などと子ども同士声をかけ合いながら、十六個の箱積木が一本の電車に

つながります。みんなで電車の歌を歌いながら気分よく走っていくと、突然、山の影から赤鬼。「積木でおうちを作ってかくれよう！」と、乗っていた箱積木をひっぱっていって、あわててバリケードを築く子どもたち。中にはあわてすぎて、自分の箱積木を放っておいて逃げてきた子も。「あっ、○○くんのや。」と、それをちゃんと取ってきてくれる親切な子もいます。こうして、何とかできたバリケードの中から「鬼は外！」と豆をまかれて鬼は退散。「よかったねー。」と再び車を走らせて着いたカレーライス広場で、「カレーライス鬼」（カレーライスの歌でできあがったカレーのブタ肉やジャガイモなどになった子が食べられないように逃げる鬼遊び）をして楽しみました。

と、ざっとまあこんなストーリーで展開した生活発表会でした。ちょっと見ただけではストーリーのつじつまが不自然でわかりにくいのでは、という評もありましたが、子どもたちの大好きな箱積木を使って、いつもやっているごっこ遊びや、追いかけかくれ遊びのいくつかを、保護者の人たちにぜひ見てもらいたいという思いがありました。

〈保護者が作った箱積木〉

この箱積木は、保護者ひとりひとりが、半年ほど前に自分の子のために作ったものなのです。三年くらい前に保母が作った箱積木がみんな大好きで、車にして乗り回していたのですが、次々と消耗して数が少なくなっていて、よく取り合いになっていました。とりあえず、数をそろえようと、クラス懇談会の時に「おもちゃを作る会」を計画しました。その時、保母は欲ばりなことを思いついたのです。みんなで使う共同財産としてのおもちゃ

でなく、この際、以前から考えていた個人用おもちゃを作ってもらうことにしようと。懇談会の時に、欠席の人の分も含めてみんなでトマトのダンボール箱を分解して組み立て直し、牛乳パックに新聞紙をつめたものをはめこんで箱の形にするところまで共同作業しました。そのあと各自、家へ持ち帰り、気に入ったように布貼りしてもらいました。

〈なぜ個人用なのか〉

この一歳児たちは四～十一月生まれで、年度当初からことばもよく発達しており、みんなで共感し合ったり、イメージを共有して遊べる反面、ある場所でおもしろそうな遊びが始まると、サッと寄ってきて、友だちの持っているおもちゃや場所をとってけんかになったり、その様子を見ていた子がけんかの仲裁に入ってたたいたりひっぱったりと更にけんかの渦が広がることもしばしばありました。またおもちゃを数多くそろえても、ちょっとの違いを見分けて、これでなければとこだわる子や、たくさん同じ物を集めたがる子もいます。物の取り合いを通して「順番に使おうね」ということも大切だけれど、ひとりひとりがけんかをせずにじっくりと物とかかわって遊べることも保障したいと、個人用おもちゃを考えていたところだったのです。

保育園ではタオルとか服など生活用品は個人持ちがほとんどですが、おもちゃはたいていみんなの物です。保母が目新しい物を持って部屋に入いると「センセのか？」とか「みんなのか？」とすぐ尋ねるし、だれかに貸そうものなら、「○○ちゃんのか？」と聞きます。けんかになると、「みんなのやでー。」（だからボクが使ってもいいはずだ）とか、「○○ちゃんのやでー。」（みんなのだけれど

も今は自分が使っていることを主張）などということばを使い、一歳児なりに「みんなの」、「じぶんの」などの所有関係の複雑さを頭の中で考えて、ことばにしているのでしょう。そんな時に、所有関係の明確な「個人用おもちゃ」があることによって、一歳児たちにとってよりわかりやすく考えることができるのではないだろうかという期待もありました。

〈予想以上の展開〉

個人用箱積木は保護者の労力や費用の心配はあったのですが、数日のうちにでき上がって持ってきた自分の箱積木に、どの子も誇らしげで、お互いの箱積木を「〇〇ちゃんの」とすぐに言い当てるのにはびっくり。乗り物に見立てての遊びのほかにはテーブル、椅子、ベッドに。また紙しばいを見る時にこしかけて見やすい位置を作ったり、友だちを呼んで「いっしょにすわろ」と共感し合ったりしています。舞台にして上で歌ったり、イタズラの時の踏み台に使うことも思いついた子どもたちです。また、手ごわい相手にも「じぶんの」を主張できたり、「かして」「使っていいよ」などのことばも自然に出てきたように思います。

また、けんかをして泣いている友だちにその子の箱積木を持ってきてなぐさめてやっている姿を見ると、子どもたちはこんなにもこの自分のおもちゃに愛着を感じて心のよりどころにしているのか、と感動しました。

またこんなこともありました。ある時、箱積木をつなげて一本橋を作り、その上をそろりそろりとみんなで渡る遊びをしていました。すると突然ゆうちゃんが足元に自分の箱積木を発見。「ゆうのやー。」と抱きかかえて

しまって、他の子が通れなくなりました。保母は、あわやけんかに…と思いましたが、後続の子たちは、なんとゆうちゃんの箱積木のところだけ下におりて、次の箱積木へと移っていったのです。「これはゆうちゃんのなのだから」と認めて、みんなは一つの遊びを続けたわけです。

このように、この個人用箱積木は私たちの予想以上に子どもたちの生き生きといろんな心や遊びの場面を見せてくれたので、その姿をぜひ発表会で見てもらいたかったのです。「くりのみは何でも（バザーや大そうじとかも…）保護者にやらせるんだから…」という文句が聞こえるのではと心配していたのですが、発表会後の懇談会で「文句言いたかったけど、作ったかいがあったワ」と言われ、ホッとしました。

〈おわりに〉

この文章は、昨年度受け持っていた一歳児クラスでの保育のまとめの一部を、担任三名で記録していたものをもとに書いたものです。

『幼児の教育』にはしばらくごぶさたしていたのですが、最近見せていただいた、十一月号「幼稚園のなかのいざこざ」（倉持氏）や十月号「心が育つということ」（豊田氏）に子どもの、物や人へのかかわりについて深く観察、研究されたものを読ませていただき、現場の保母としては、大変勉強になりました。

（京都市・くりのみ保育園）

保育者養成の今日的課題 (3)

～少子化傾向を中心として～

チーム観察法の開発

前田あけみ

四、カリキュラムの実際

さて、筆者はチーム観察を、以下の二種類のカリキュラムに取り入れている。

A―ゼミを中心とした卒論のための基礎演習として。その資料は各自の卒論の基礎資料ともなる。四年生七～十名の観察チーム（L_1／一名、L_2／二～三名、L_3／三～五名、L教師／一名、Lフリー／〇～一名、スーパーバイズ／前田）。平成二年度は、三歳児の観察一回、四歳児四回、五歳児八回実施。

B―三年生対象の保育内容の研究（社会）の演習として。平成二年度は、三年生を八名前後の三グループに分け、三歳児・四歳児・五歳児の観察をそれぞれ後期に二回実施し、学生はL_3の視点で観察。この時、L_1、L_2、L教師は、Aに参加している四年生。各グループ二回の観察終了後、テーマ別に簡単なグループ研究発表。

いずれも、時間帯は、

九時～十時三〇分　付属幼稚園で観察。

十一時～三時　（昼食を含む）観察記録を基に討議・分

析用の観察資料を作成。

三時～六時三〇分　資料を基に、討議・分析。多くの場合、担任教諭も参加。

Aの演習は、一日参加。Bの演習は、四年生は一日参加。三年生は他授業との関係で、九時～十時三〇分、三時～六時三〇分の参加となる。

分析用の観察記録資料例は次頁の如くである。

五、実践科学における状況の意味

ところで、保育学は、実践科学である。この実践科学において、状況はどのような意味をもつのであろうか。これについて、ランゲフェルド(M. J. Langeveld 1905—1989)は、次のように述べている。「実践科学が具体的状況から一般的に知識の領域を問題にすること、この一般領域の中にあるものをまず視点ないし方法として、また具体的に規定さるべき素材として眺めること、非実践的な科学の中では『異質』であった知識内容を、所与の状況を解釈してゆく上でそれがもつ意味と価値という点から探究していくことを意味している。教育学者の実践的な思考は、具体的状況から具体的状況に向かって進む」〈注1〉彼は実践科学としての教育学の問いは、まずこのような教育的状況の理解から始まらなければならず、その教育的状況への具体的アプローチとして、現象学的方法を取っている。

保育学も実践科学であるとすれば、この具体的状況の理解に関する課題は、保育者養成の主要な課題と言える。筆者は、この具体的保育状況に関する理解を深める具体的養成方法として、チーム観察を考えている。

六、三つの複眼

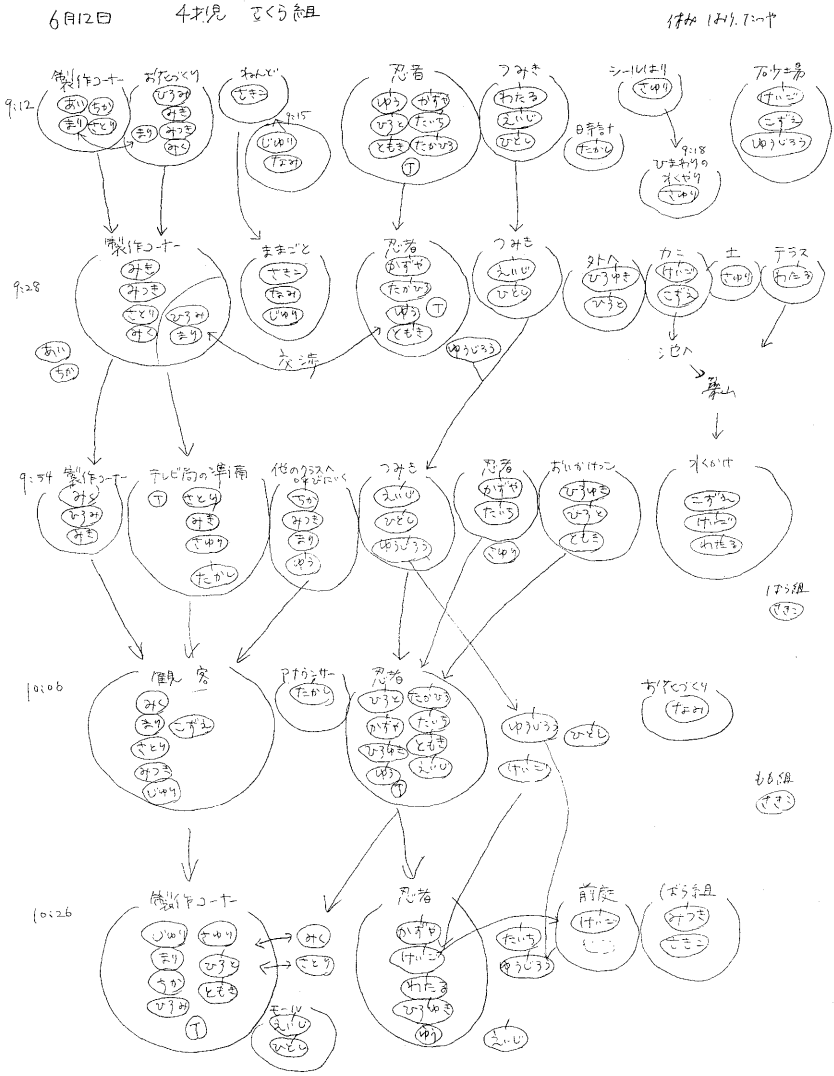
この保育状況へ、三つの複眼を持ってアプローチしている。すなわち

Aの複眼　教官の目と学生の目

Bの複眼　L_1…組全体を観る目

L_2…小グループまたはコーナー遊びなどの遊びのかたまりを観る目

＜L1の資料＞


6月12日
4才児 さくら組
9:12
9:28
9:34
10:06
10:26
製作コーナー
おたのしみ
わんぱく
忍者
つみき
シールはり
プラッキング
時計さん
ひきわりの
まままごと
交流
外へ
カニ
土
テラス
池へ
夢山
テレビ前の準備
他のクラスへ
おいかけっこ
水くらべ
1ぞう組
観客
アナウンサー
おたのしみ
もも組
前庭
ぞう組

＜L1, L2 の資料＞

2 9:22～9:42 コーナー遊びの充実

L1：吉本
L2：上田
橋場
米田

〈製作〉

まり「ねえ、ことりちゃん これどこにあった？（ビニールのふくろ）」
ことり「先生にもらうの」
まり（先生の所へ行って）「ねえ、何て言ったらいいの？」
ことり「赤いふくろ ちょうだい」
まり「先生、赤いふくろ ちょうだい」

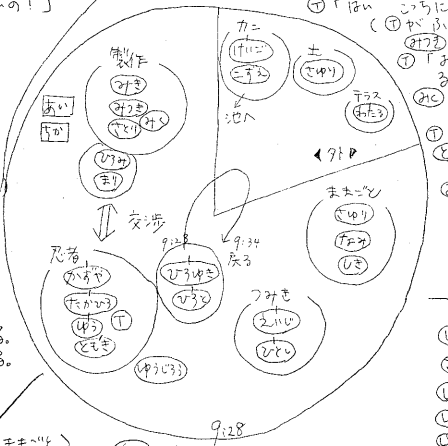
★ ★ ★

まり「ねえ、ことりちゃん これ どうやって ひるの？」
（ことりは自分のかごに夢中）
まり（ひろみに）「ねえ これ やって」
ひろみ「何になりたいの」
まり（ことりを指して）「あんなの」
れい「これどうすればいいのか分からんない」（やんむり）
「そうだ、ゴムでやればいい」
ひろみ「あそこにゴムあるよ」

まり「先生 これ ここ 全部 ひっちゃったの」
（ビニールの服の首のところ）
T「あら－ ○○○○」
れい「先生 これゴムにしたいの」（ヘアバンド）
T「ゴムにしたいの？ こうやって ホチキスでとめればいいよ」
まり「先生 どこにしたらいいの？」
T「はい こっちにあけてごらん」
（Tがふくろをもちあげて まりが ひる）
みつき 大きく穴をあけたのを つまんで しばっている
T「おー そりゃいいわ。自分で考えてやってるよ。」
れい「先生 これどうしたらいい？」（ビニールぶくろもってくる）
T「どうしたらいいかねー？」
ともき「先生がかぶればいい」

★ ★ ★

みつき「ばら よんでくる－」
みつき あい ことり ばら組にTVの宣伝にいく。「TV はじまるよ－」
「今度はもしー」と もも組に行くが もも組では きらきら星の歌が はじまっている ため 入口で だまって まっている。



〈忍者 in 保育室〉

SCENE1
ともき「先生 どうやんが？
これじゃいいがか？
先生 知らない。こうか？
これで テープはるがか？」と 高桑Tに せまる。
ともきは 高桑Tに 返答をもらって 剣にテープを貼る。
ゆう「よい たかひろ ながなが かっこいいじゃん」
たかひろ 高桑Tに「剣じゃ作れない」と言う。
高桑T「えんぴつで こうやって」と かずやの方をさす。
ともき「この次どうやんが」

SCENE2
かずや ずっと 座って 剣を作っていたので
「よい 足しびれた」
たかひろ「おれだって。
お前のは 剣じゃないよ。」
かずや「ちがうよ。
あ、しゅりけん（細かく切った 正方形）。
お前もとっか。」

〈ままごと〉

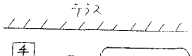
SCENE1 なみ、じゅりのホットケーキのように のっていた、チョボ を取る。
じゅり「どうして、ホットケーキのバター取ったの。」ひき「あほう。」
バターなのよ。」
なみ「ちゃんと、ご飯食べなさいね。」じゅり パクッと食べる。
「ホットケーキ 包丁で切りますよ。出来ました 食べて下さい。」「あほう」
じゅりに ホットケーキ半分を 皿にのせ、「どうぞ。」「あほう」
じゅり「いいのよ、私、ご飯 自分で作るから。」「あほう。」
なみ「大きい 蜘蛛 つくろう。」「あほう。」「あほう」
じゅり「大きい 蜘蛛 つくろうって 言ったのは なみちゃんだよ。」
あっ じゅりの なみの 内緒話 ひき 手を止めて見ている。

じゅり カップを3つ 置いて「お茶かわいたら、これに入れてね。」
ひき「あほう」
じゅり「誰だ（あほうと言ったのは。）」なみ「私じゃないよ。」
じゅり「あんた（さきこ）でしょ。」ひき「あほう。」
じゅり「あほうって言ったら、自分が あほでしょ。（ムッ）」
ひき「あほう」「あほう」と 言い続ける。

SCENE2
じゅり なみ がテーブルに 食器を セットする。
しょう油入れの 白い入れ物を ひきこが 持っていこうとする。
ひき「ちがっと!!」ひきと ひきこ 取り合い。相方 譲らない。
じゅり「だめよ、ひきちゃん 自分で（別のもの）頂いてたでしょ。」
ひき 自分の方に 持っていく。なみ「あーあ…お正油入れに 使ったのに。」「お茶入れるぞ。」（ひき）うわんどの入った入れものに お茶 ちょぐ（ぶり）。「あほう、あーのびっちゃった。」
なみ「ホットケーキ 作って あげようと 思ったのに もう 作ってあげない。」「やってに 遊んどって。」
ひきこ、じゅりの 顔をつく「なによ！ みつめ合ってるのに こわれるじゃない。」

＜L3の資料＞

'90 6/12　＜圭吾 君＞　L3；森



① だんごむしの観察

9:15 砂場でだんごむしの観察をする。
砂を掘ってその中にだんごむしをおく。

「ここはだんごむしやろうんだかねぇ。」　ゆうと「じゃあ、ここシャワーのとこにしようか。」

「ばかやろう。だんごむしの？」

砂を深く掘っていく。

「ほら、こんなにだんごむしの顔が広くなっただ。」

さかり「あ、ちょうちょだ。」

―― ちょうを見る ――

さかりはすずを動かしていきたいが、すずは動こうとはしない。

―― だんごむしの観察 ――

9:18 だんごむしの動きを追いながら

「にげたいんだよ。きっと。」

すずがだんごむしに砂をかける。

「やめろ！」

だんごむしに砂をかける。

（すずに話しかける）「先ってさあ…」（すずは自分の話をする）

すず「うちのおじいちゃんねぇ、トマト作っているの。」

「何のトマト？」

すず「ミニトマト」

「ミニトマト？　うちにもある。」

（にすずに再び話しかける。）

「先ってさあ、本葉咲かないと花咲かないもんねぇ。」

すずはきいているが、返答しない様子。

さかりがすずの方にやってきて、耳うちする。

「きょうちゃった、きょうちゃった。」

9:21 再びだんごむしに向かって声をかける。

「がんばれよ、だんごむし！」

＜L教師の資料＞

1　9:10 ～ 9:21　好きな遊びをする

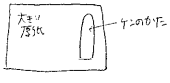
《高桑先生》　L教師；藤井

① 9:18 ～ 9:43　衣装づくりを手伝う

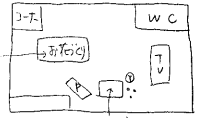
9:18

T「いい方法教えてあげる。これあてて書くと同じのとれるよ。いい？」と ともき に鉛筆をわたす。

「鉛筆でさ、こうやってごらん？」と先生が ともき の手を持って一緒にひく。「そしたら合うと思うよ。線のとおりにひくと合うと思うよ。」



型のもとになった ▯ を「ここに置いておくよ」と机の上に置く。「出したゴミはここですよ。」と ゴミ箱をさす。



さとり「先生。赤い袋下さい。」

ゆう「先生。」

T ゆうの顔見て笑う

「いたくない？　だいじょうぶ？」　ゆう「いたくない」

さとり「赤い袋下さい。」

「赤い袋！」と言ってとり出す。

T は ともき がズックをふんでいるのを見てなおす。

「赤い袋、今日　あっくないかな？」　さとり「あっくない。」

「これで2つ ▯ できたよ。」　ともき「このあとどうするが？」

「教えてもらわれ。どいた、教えて。」

ひろと「ここにテープはるやろ。しかくくもかって、長しかくにきるが。」

L_3…抽出児を個人的に追う目

Cの複眼　保育者の目と観察者の目（保育を内側から担うものの目と外側から観るものの目）

この複眼の実際的意味を「子供の内面を理解する」ということに焦点を当て、事例〈注2〉を通して考えてみる。

現象学的方法を仮に「目に見える行動の背後にある子供の内面の感情や動機、あるいは、子供によって感じられている世界に接近していく方法」〈注3〉とするとしよう。この方法は、（かかわりの中で）相手の行動の意味を共感的に深く理解し、子供自身の見方、感じ方に従って理解する方法である。そのためには、微妙な表現までも子供の内的世界の現れとして捉える真摯な態度が、必要とされるであろう。この時大人は、さまざまな思いをめぐらし、場合によっては、感情移入して、子供の体験の深部に触れるようと試みる。しかしながら、この試みの内面過程は、他の人にはそのままでは見透かしたり、推察したりできないために、その理解が一人よがりのものになってしまう危険をも孕んでもいる。ところが、その過程を分析資料の作成や討議したりすることによって、外界に形象化し、触知でき検証できる世界に客体化するならば、子供の内的世界を、一人よがりに陥らずに、より豊かに理解することを可能にするのではないだろうか。集団討議を通して複眼で保育状況を据え直し、多様な意見のつき合わせによって、子供や保育への理解の内容が高まっていくことが期待されるのではないだろうか。

複眼によって、子供の理解が深まったと思われる事例の一部を次に紹介する。

七、Cの保育者と観察者の複眼による分析例

さきこは、九時過ぎから突然「あほう、あほう」と言い始める。しかしながら、それはそれまで**さきこ**の細かな動きを見て来なかった者にとっては、突然のことであるが、彼女なりの理由があるのであり、その内容が午後の討議の時間に**さきこ**を観察していたL_2やL_3によって明

らかにされた。

〈**さきこ**を観察していたL_2とL_3の記録より〉

さきこは、九時一〇分ごろから、ままごとコーナーで、一人で粘土でごちそうを作っている。**じゅり**と**なみ**が「まぜて」とやって来て、ごちそうを作り始める。

さきこが二人に向かい「あした、私プール行ったんぜ」と三回大きな声で言う。「大きいがんぜ、お母さんと一緒に行ったがんぜ。滑り台もシャワーもあったんぜ。すごいでしょねぇ、すごいでしょ。」と大きな声で話す。

じゅりと**なみ**はホットケーキを作り続ける。

なみが、大きなホットケーキを作り、嬉しそうに「私、ホットケーキを作ってんの」

じゅり「いらないわよ、ここにあるんだから」と皿に入った自分のホットケーキを差し出して見せる。

なみは、**じゅり**のホットケーキの上にのっていたちょぼを取る。

じゅり「どうしてバター取ったの。バターなのよ」

なみ「ちゃんと御飯食べなさいね」

じゅりぱくっと食べる。

（この頃から、同じテーブルにいる**さきこ**が傍で「あほう、あほう」と言い始める。）

（中略）

じゅりカップを三つ置いて「お茶が沸いたら、これに入れてね」

さきこ「あほう」

じゅり「誰だ（あほうと言ったのは）」

なみ「わたしじゃないよ」

じゅり「あんた（さきこ）でしょ」

さきこ「あほう」

じゅり「あほうって言ったら、自分があほでしょ！」

さきこ「あほう、あほう」と言い続ける。

じゅりと**なみ**がテーブルの上に食器をセットする。醤油入れの白い入れ物を**さきこ**が持って行こうとする。

なみ「ちょっと！」**なみ**と**さきこ**が取り合いし、双方離さない。

じゅり「さきちゃんだめだよ、自分で取ってこなきゃ」

さきこ自分の方に持って行く。

なみ「あーあ、お醤油入れに使っていたのに。ホットケーキ作ってあげようと思っていたのにもう作ってあげない。勝手に遊んで」

さきこ竹串の先に粘土をつけたもので**じゅり**の頭をつつく。

なみ「何よ三つ編みしているのに。こわれるじゃない！」と怒る。

さきこ「あほう」と言い残して、一人ばら組（ばら組の担任は、三歳児の時の**さきこ**の担任）へ行く。

このように**さきこ**の動きを細かく追っていくならば、**さきこ**の「あほう、あほう」の意味が見えてくる。学生は「友達に反発をかんじるようなことをしている**さきこ**ちゃんなのだけれども、本当はすごく一緒に遊んでもらいたいとか、『あほう、あほう』と言いたくなるような理由、**じゅり**ちゃんや、**なみ**ちゃんが相手にしてくれなかったからだろうと思って見ていました」と述べる。

このような細かさは、遭遇できる時もあれば、できないこともある。実際保育者は、午後の討議の時間になり、**さきこ**のこの「あほう」へ至る過程や、部屋を出て行った後、どのような人に出会い自己回復してきたかについて細かく知った。（もちろん、大まかな動きについては捉えていたが）このような細かさに、チーム観察によって一つでも多く遭遇できるならば、子供の行動の意味の理解が深まって行くであろう。

保育者は、一人一人の子供を大切にしようと思いながらも、実際には、その時その時の選択をしながら、多くの子供とかかわることが多い。そして、その子供にとって幼稚園での時間がどのように流れているか一人の子供の軌跡をたどるようにして子供を見ることは、必ずしもたやすくない。ところが、L_2や特にL_3として子供を観察するならば、その子供の軌跡に近づくことができる。この軌跡を保育者と共有できるならば、保育の内側を担うものと外から見ているものが一緒になって子供の理解を深めることが可能となる。

さて、このL_2、L_3の報告を聞いて、もちろん保育者は、もう少し**さきこ**に細かくかかわる必要があったこと、そしてそれを基に明日への援助の見通しを立てるの

だが、保育中は、次のような二つの理由から、遠くから見守っている。一つは、**さきこ**は三日前頃まで、保育者とずっと離れず一日を過ごしており、この日保育者から離れて活動したことは、新しい意味ある動きで、遠くから見守るのがよいと判断したことによる。もう一つは、この時間保育者はテレビごっこの遊びを子供と作りながら、特に**ゆう**の援助をしている。**ゆう**は、しばらく前まで、ひたすら走り回って、何かしたいのだけれども、なかなか遊び込めないように見えた。そこで、保育者は、ひたすら走り回ると言う自己的世界から、忍者になって走ったり、テレビに出演するという対人関係的活動への誘導を試みたのである。

また、保育者から、**じゅり**や**なみ**は、昨日まで体の調子が悪く休んでいたことが伝えられ、朝の始まりの時間に**さきこ**と場所は共有していても、心理的空間が**さきこ**まで広がっていない状態であったと推察された。

さらに、この日のメイン活動となったテレビごっこは、段ボールの中に入ってお化けになった事からイメージされたこと、そのお化けは、自分達が蒔いた豆を食べに来る鳩を脅すために始まったと言う、大きな遊びの流れも保育者によって明らかになった。

このような討議を通して、観察者は、今ここで空間的に広がっている保育状況に関してより構造的な把握を可能としているのに対して、保育者は、連続的な日の活動の変化や子供の姿を洗い出し、今ここでの状況の、長期

的時間的広がりを明らかにしている。また、外からは見えない保育者の思い（ぎりぎりの選択…実はこの選択の観点やプロセスは保育者養成には重要な課題である）も伝えられ、今展開され見えている現実と余剰現実（もしかして、展開可能な他の潜在的現実）とを合わせて、現実が何重にも捉えられるようになっている。チーム観察はこのように、時間的、空間的、潜在可能的に圧縮された、子供の行為や関係、保育状況の「意味」を観る活動であるとも言える。

保育実践的考察は、行為の意味を問う。この行為は常に状況における行為である。この状況への考察を抜きにして、意味を問うことは、難しい。この考察の基盤となる保育状況を共有することで、本当の意味でのコミュニケーションが可能となる。それは、それぞれの立場、視点を異にして状況にアプローチしながら、どれが正しい理解なのかを問うのではなく、どのような視点で見るならばどのように見え、また異なる視点からはどのように見えるかについて、より多角的に状況や行為に関する理解が高まることを目指している。そして、子供の行為についていうなら、その行為の背後にある、歴史的因果（今までどうであったから、そのようであるのか）、体系的因果（今ここで、どのような人や物、自分と出会っているからそうなのか）、志向的因果（これからどのように変わろうとするからそうなのか）をもとに複眼をもって明らかにしていく作業であるとも言える。〈注4〉

八、少子化時代の保育者養成とチーム観察

少子化によって、子供達の人間関係の希薄化が、危惧されている。しかしながら、質の高い人間関係や集団体験がなされるならば、その関係状況の中で内的経験を成立させ、自己の成長に取り入れ、実質的な成長を促すことができると期待される。保育者が、子供の心や人間関係・保育状況の発展に関する理解が深いならば、その保育状況における潜在的な人間関係や集団の発展の契機を顕在化させ、質の高い人間関係や集団体験の成立を可能にする。その意味において、このチーム観察は、子供の

心や人間関係や集団の発展の契機に関する〝みえ〟を成立させる一つの専門的トレーニングとして筆者は、期待している。

この方法に関する残された課題としては、

①観察の人数が、七人以上になり、子供や保育にどのような影響を与えるか。

②時間を短縮する方法はないか。

③子供の行為の意味を探りながら観察する時（観ることに没頭すると）、必ずしも正確な記録が残らない矛盾をどう克服するか。

④何らかの研究テーマを設定した時に本当に基礎資料として分析に耐えうるか。

⑤その保育者の保育批判を招きかねない危険性を、どのように建設的討議として維持し続けるか。

⑥養成機関のどのような観察が、現場の保育の発展にも役立つのか等であり、またこの観察法自体の効果も今後吟味されなければならない。

最後にこのような観察に協力してくれた、富山大学教育学部付属幼稚園の子供たち、ディスカッションに参加してくださった先生方に感謝いたします。また、貴重な記録を提供したり、新しい試みを共に模索してくれた、学生達にも感謝いたします。

〈注〉

注1　ランゲフェルド著／和田修一監訳「教育の人間学的考察」改訂版P143未来社　一九七三

注2　一九九〇年六月十二日の四歳児クラス（担任高桑幸子教諭）での観察事例

注3　森上史朗の定義による

注4　この三つの因果の分類は、松村康平（前お茶の水大学教授）による

（富山大学教育学部）

ある日の育児日記から (5)

佐藤　和代

休みを利用して、敬（夫です）の田舎へ行ってきました。着いて二日目くらいから、圭の言葉が急に進歩してしまって、びっくり。

今まで「とーと（お父さん）」、「かっか（お母さん）」、「まんま」など、簡単な一語文しか話さなかったのに、いきなり文章をしゃべり出したのです。初めての文章は「てーたん（けいちゃん）のぼうしないよー」。うっ、主語に述語に、修飾語まであるっ!!　親はしばし呆然です。

田舎の家は大家族。やはりいつもと刺激の量が違ったのでしょう。二日目の夜は、自分でもしゃべれることに興奮して、切れ目なくおしゃべり。なかなか眠ろうとしませんでした。

家に帰って、友人に電話でこのことを伝える（自慢する?）と、友人が言いました。「言葉って、ある日突然わーっと出てくることがあるんだって、言葉の爆発っていうのよ。」爆発。そう、ちょうどそんなイメージです。今までためにためてきた〝言葉〟というエネルギーを、一度に放出したかのよう。

もっとも、〝文章を話す〟なんて思っているのは親だけ。他人が聞けば、何言っているのか全然わからない…というものなのですけど。

逆子がくれたもの

河合　聡子

娘が生まれてから十か月が経ちました。娘を抱きながら、いつまでもこの大きさでいて欲しいと願ったり、自分も赤ちゃんになりたいと思ったり、時には、目の前にいる娘が突然そこに現れたような不思議な気持ちになったり、家事をする人が他にいてくれたらもっと娘と遊ぶことができるのに、と思ったりしながら生活しています。幼稚園に勤めることになった時、『何よりも、子どもと一緒にいることが嬉しい先生でいてね』と言ってくださる方がありましたが、母親になってからも、この言葉が輝き、私を支えてくれています。嬉しい毎日でしたが、逆子で生まれたことを思うと気持ちが落ち込むことがほんの数日前まであったことも事実です。

一、初めて逆子とわかった日

初めて逆子だと言われたのは、里帰り出産のために実家に戻る一か月程前のことでした。なるべく早い時期から母子の状態を知っていただこうと思い、

お世話になる先生に診察を受けたのです。東京で健診を受けていた時には逆子のことは何も言われたことはありませんし、初めて超音波で見る赤ちゃんの姿に、はしゃぐような気持ちで診察台に横になっていました。それが「逆さまだ」というお医者様のひと言で暗い気持ちになってしまったのです。何の根拠もなかったのですが、自分のおなかの子は絶対に逆子になるわけがないと決めつけていましたので心の準備もありませんでした。また、陣痛促進剤等の薬を使うことなく自然分娩で産みたい、出産後すぐに胸に抱いて乳をふくませたい、入院中も母子同室で過ごしたい、という様々な希望がかなえられないのではないか、という不安に駆られたのです。逆子がなおるという姿勢（逆子体操）を教わって帰って来ました。

東京に戻り、早速逆子体操をしました。あまりに苦しくて、十五分続けるように、という所、三分程で悲鳴をあげてしまいました。隣で見ていた夫は「痛いことはやめた方がいい。赤ちゃんも苦しいよ」と忠告してくれましたが、あと一分でも二分でも頑張ろうとその姿勢を保ちました。もう続けられない、止めようと思った時は肩の痛みと情けなさで、涙が出てきました。落ち着いてから考えると確かに私が痛いことは赤ちゃんにも良いことはない、逆子体操はもうやりませんでした。四日後、東京の病院で戻っている（逆子ではない）と言われた時は身も心も軽やかで妊婦なのにもかかわらずスキップをして帰る程でした。

それからも東京の病院では逆子と言われることもなく、里帰りする三日前の健診でも、頭は下にあるということでした。

二、再び逆子と言われてから

予定日の五週間前に里帰りし、診察を受けました。「逆子はどうかな」と聞かれた時は、東京の病院では、頭は下にあり逆子に戻ることはないと言わ

れていたので自信があったのに、お医者様からは「なおっていない」と意外な返事。初めて言われた時よりはショックも少なく「きっとなおります」と元気に宣言したのですが、「奇蹟が起これば」と言われてしまい、しょんぼりと帰りました。

東京の病院で逆子はなおっていると言われていましたが、その時ももしかしたら逆子のままだったのかもしれないと思ったり、超音波が嫌で、その度にいたずらのつもりでひっくり返るのかしら、と非現実的にことを考えたりもしました。しかしどうして逆子なのかは全く意味がないことにすぐ気付き、戻ることを信じることにしました。

その晩からは入浴の際「ポンポコ（赤ちゃんの当時の呼び名）はさかさまなのよ。クルッとひっくり返ってね。その方が楽に出てこられるから。」と必ず話すようにしました。また苦しかった逆子体操ももう一度指導を受け真面目にやることにしました。

逆子をなおそうと努力する一方で、おなかの赤ちゃんの居心地も考えるようになっていました。私はつわりを和らげるお灸をし、それが収まってからは安産の為のお灸を続けていました。安産の為のお灸は逆子をなおすのにも有効だと聞いていました。そのお灸をしているのにもかかわらず逆子だということは、よほどさかさまの姿勢が居心地が良いものなのであろう、それならそんなに神経質になるのはやめようと思ったのです。

一週間後の健診では、赤ちゃんの足が私の骨盤に入っているので、きっと逆子はなおらないこと、そして帝王切開にするかどうかの話がありました。

その病院では逆子だという理由だけで帝王切開にはしないが、ある特定の障害を持った子どもの出生時の状況を調べてみると、逆子で自然分娩した場合の方が、逆子でなくて自然分娩した場合に比べ、はるかに確率が高くなっているので、逆子なら絶対に帝王切開にすることを勧める小児科医が多い、と説明されました。そして、次の週までに帝王切開にす

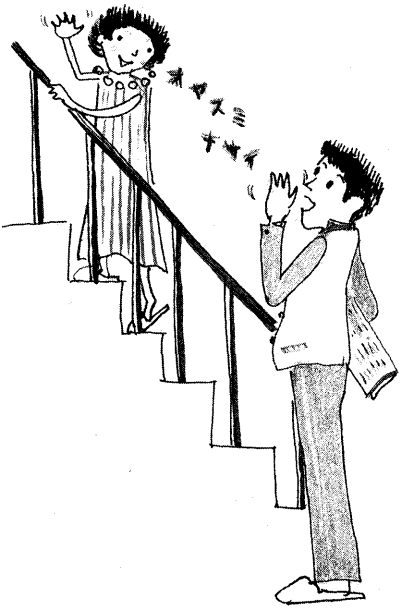
るかどうか自分で決めるように告げられたのです。

帰り道、また涙が出てきました。居心地がいいならそれでいい、などとのんびりしてはいられなくなりました。そして自分で決めなくてはならない。私のそれまでの人生の中で一番重大な選択にも思えました。

二時間位は迷ったり泣きそうになったりしましたが、分娩台にあがってから逆子がなおることもある。そして私の願いを赤ちゃんは聞き入れてくれると信じ、帝王切開は拒むことにしました。

帝王切開に抵抗があったのは、産道を通るときの皮膚刺激が赤ちゃんにとってとても大切だと思っていたことと、赤ちゃんは自分が出てきたい時に生まれてくると信じていたためです。

自分では、はっきりと決めたつもりでいましたが、両親と話をしているうちにまた迷い始めました。夫に連絡をとった所、産婦人科医の親友に相談してくれました。逆子の場合は一番大きな頭が最後に出るためへその緒がひっかかると呼吸ができなくなり障害をもつことになるという説明があり、その上で分娩監視装置をつけ、赤ちゃんの様子が少しでもおかしかったらその時は切った方がよい、という



アドバイスだったそうで、私もそれに納得し、覚悟もできてぐっすり眠ることができました。

いつまでも、赤ちゃんがおなかの中にいてずっと一緒だったらいいと思っていた私でしたが、この日初めて赤ちゃんは出てくるということを実感し、またお医者様が産ませてまれるのではなく、私が産むということを改めて確認させられたような気がしていました。そして、子どもを信頼し、尊重することは、生まれた後のことかと思っていたのが、おなかの中にいる時から始まっていることも意識し、どんな状態でも、誇りと自信をもって産もうと強く思ったのでした。

三、出てくるまでの日々

赤ちゃんの頭がなるべく小さいうちに生まれるように、お医者様からは、床みがきと歩くことを命じられました。歩くのも坂道が有効で、特に階段を登って坂を降りるとよいとのことでしたので、買物へ行くのも坂のある道を通るように遠回りしたり、階段を探し回ったりしました。一番効率が良いのは階段と坂の両方がある近くの高校でした。一周するのに約五分かかる道を十回位歩いていました。学校ですので昼間は人目も多く毎朝早く起きて歩いていました。普段なら無駄だと思うこともこの時は大きな意味があることでしたし、赤ちゃんが出やすくなるためでしたから、とても充実した時間でした。

自分では努力していたつもりでしたが、おなかが張ってくることもなく、お医者様には進歩がないと言われる位でした。今日生まれいもいい、とも言われましたが、スキップができる程、生まれてくる気配は全く感じられませんでした。

予定日の一週間前に、お医者様から予定日までしか待てないと言われてからは、神経が過敏になり、母の「もうすぐ生まれるわね」という言葉にも素直に喜ぶことができず、八当たりして涙ぐんでしまったり、心掛けが悪かったためかもしれないと自分を

責めたりしていました。十分に納得しているつもりなのに、出産に関する本の逆子の欄を読みあさり、少しでも安心できる材料を探したりもしていました。

予定日。いつもは午前中に診察を受けていましたが、おなかの中の子が少しでも出る気になってくれればいいとわずかな希望を持ち、午後になってから病院へ出かけました。この小さな抵抗が功を奏したのか、三日間の猶予を与えられ、朝九時に来るように注意もされて帰宅しました。

待てない、というお医者様の言葉で、何らかの薬を使うことは私にも想像できていました。帝王切開にするかどうか決める時に相談した産婦人科医の友人からは使い方を間違わない限り、母体で作り出すのと同じ物質だから心配ないと言われていましたが、それでもできたら使うことは避けたかったのです。三日間の猶予は与えられましたが、三日間のうちに陣痛が来ることに自信が持てず、素直に喜ぶことはできませんでした。

そして、三日後、入院の用意をし、夫と共に病院へ行きました。内診を受け、分娩監視装置で子宮の収縮の様子を見た結果、この日もまた三日後に来るようにと言われ帰されました。

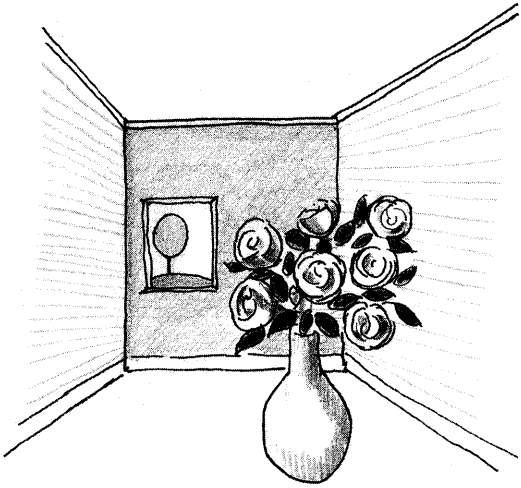
拍子抜けしてしまいましたが、気持ちの動揺はありませんでした。覚悟ができたのです。男の子、女の子、それぞれの名前を最終的に決め、お墓参りもしました。朝の階段登りと坂下り、安産のお灸も続けました。前日には電車を乗り継いで三時間程かかる所から鍼灸師の資格を持つ叔母が突然来て、逆子をなおすお灸をしてくれました。

当日の様子はビデオで撮ってあるのですが、病院にはいるまではにこにこ笑顔なのが、待合室では緊張のために引きつった表情をしているのがよくわかります。

点滴で薬を落とした途端陣痛が始まりました。陣痛の最中は逆子のことを忘れ、分娩台の上でいきん

でいる時は、あまりの痛みに、帝王切開にしてもらってもよかったなどといい加減なことを思っていました。

そして、点滴を始めて約五時間後、娘はお尻から出てきました。夫と私の母が目を真赤にして分娩室に入ってきました。後で聞くと、二人は産声を聞いた途端抱き合って泣いていたということでした。私は、と言えばお尻から出てきたのならすぐに女の子だとわかったのに、全部出てから教えるものなのだ、と思ったり、もう階段登りをしなくてもいいとホッとしていました。すぐに胸にのせて乳を含ませることもできました。無事に産まれてきたことは勿論嬉しいことでしたが、涙は出ませんでした。これから一緒に生きていこうね、と声をかけたくなるような喜びでした。そして逆子だったことも忘れてしまっていました。



四、その後の育児の中で

お尻から先に出てきたために娘のお尻は皮がむけ赤くなっていました。退院しても傷が治るまでは、おむつ替えのたびに消毒し、ガーゼもあてなおしていました。そのたびに逆子で産まれてきたことを確

認していたわけですが、暗い気持ちにはなりませんでした。それがしばらくしてベビー雑誌の投稿などで、いかに自分が楽なお産だったかという文章や、自然分娩の素晴らしさを唱った記事などを見ると、自分が足りないことがあったのではないかという寂しい気持ちがするようになっていました。また安産だったかと尋ねられると、必ず逆子だったことから話し始めていました。その裏には頭から生まれなかったことがいけないことのように思ってしまう自分がいました。娘との生活の中で逆子のことで心が沈むのはほんのわずかな時間でしたが、こだわりを持っているのは確かでした。

そして最近になって、私と同じように逆子のまま予定日まで数日になった友人から相談の電話をもらいました。お医者様に、きっと大丈夫だけれど危険が全くないわけではないので帝王切開にすることも考える。どうするか決めなさいと言われた。自分では帝王切開にしたくないけれど、夫の実家のご近所で、逆子で帝王切開をしなかったために出産の時にトラブルがあった方がある。きっと夫の両親は帝王切開を勧める。その前に自分でよく考えたいから私の話を聞きたいとのことでした。私は彼女にどちらがいい、とは言えませんでした。本当にわからなかったのです。「辛くて悲しいけれどお母さんはにこにこしていようね。悲しむことは赤ちゃんにとっては自分の今の存在を受け入れてもらっていないことになるもの。それは帝王切開によって失われるいろいろなことよりも、ずっとかわいそうなことかもしれない。私はできなかったから、本当にそう思う。」私はこう話していて自分が娘を悲しませていたことにやっと気付きました。母親が不安になるといい血液がおなかの赤ちゃんに行かなくなることがいけない、としか考えていなかったこともはっきりしました。

この友人からの電話のお蔭で、私は自分の出産を見直すことができました。逆子で生まれてきたこと

を思って気持ちが落ち込んでいたのは、逆子がなおらなかったことを悪いととらえていたからでした。娘を受け入れていなかったことに気づくと、自分の気持ちが落ち込む、と言って自分を守ることはあまり意味がないと考えられるようになりました。思いをかけるべき相手は娘です。私は娘に何度か謝っています。謝ろうと決めているのでもなく、義務だとも思っていませんが、謝らないではいられないのです。

謝るようになってからは私は逆子のことで落ち込むこともなくなりました。逆子だった頃の自分も以前より暖かく見られるようになり、全般的には娘を受け入れていたと思うようになっています。

それから、私は生命の誕生の素晴らしさを忘れかけていることに気づきました。赤ちゃんの育ちがより順調になるために一番良いお産というものがあるかもしれませんが、形はどうであっても、生まれてくるだけで十分価値のあることを改めて感じています。

『子どもと一緒にいることが何よりも嬉しい』という言葉が、より深い意味を持ったようで嬉しい毎日です。

最近、父親が娘や息子を殺す、祖父が孫を殺す、母親が生まれたばかりの子どもの遺体をいくつも庭に埋めていた、親が子どもを道づれに無理心中する、又、思うようにならぬ子を親が折檻する……というショッキングな事件が、相次いでおこっています。子どもにとって一番信頼していたはずの父や母から、どうしてこんなひどい目に会わなければならないのでしょう。本誌では、我が国ではまだあまり知られていない「幼児の虐待」について、シリーズで考えて行きたいと思っております。

この問題は、加害者（親）からはもちろん、被害者（子ども）からの訴えも殆どないということです。子どもは自分の親が他人から悪く思われることに抵抗があること、子ども自身が、自分が悪いせいで親にきつくしかられているという気持ちがあること、又、他人に知られることによって、一層の虐待をうけること等が理由なのでしょう。しかし、最近の傾向として、問題をおこしてしまった親から、相談所にもちこまれる例も出てきているようです。子育てに悩み、行き詰まった大人の問題としても、この〝虐待〟を考えていきたいと思っております。

※

幼稚園や保育園は集団生活のはじまりで、「みんなのものをみんなで大切に」ということが大原則のような思いがしていましたので、山口陽子先生の「個人用おもちゃ」の実践報告に、とても新しさを感じました。クレヨン、はさみ、イスなど道具に関しては、個人用の物を使っている園はたくさんありますが、おもちゃは共同で使っているところが多いのではないでしょうか。大きくなって自分で作れるようなれば、それは作品として飾ったり、遊んだりもしますが、製作物と違い、この自分の積木は、集団の中での個をしっかりと育てていく、心のより所ともなっているように思えます。

（K）

幼児の教育　第九十巻　第五号
（一九九一年五月号）

定価四五〇円（本体四三七円）

平成三年五月一日　発行
編集兼発行人　本田和子
発行所　日本幼稚園協会
東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
東京都港区三田五―一二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
東京都千代田区神田小川町三―一
振替口座　東京九―一九六四〇
電話　〇三―三二九二―七七八一

●本誌購読のご注文は、発売所フレーベル館にお願いいたします。
●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

フレーベル館
特別企画

フレーベル先生の遺跡と教育施設をたずねる

ヨーロッパ幼児教育視察

1991年７月24日(水)～８月３日(土) 11日間

ドイツ・チューリンゲン地方・フランクフルト・ベルリン・ブダペスト・パリ

昨年のツアーより

フレーベル幼稚園創設150年を祝う子どもたち

●ごあいさつ

フレーベル先生の遺跡を訪ね、幼児教育のルーツをたどりヨーロッパの幼児教育施設を視察する、「フレーベル・ツアー」も今年で第12回を迎えます。昨年ご参加の先生方から、たいへんご好評をいただきましたが、今回は特にドイツ統一後初めてのツアーになります。この機会にヨーロッパの自然と文化に触れ、ヨーロッパの幼児教育の現状をご覧になってはいかがでしょうか。

フレーベル先生生誕の家の前で（昨年のツアーより）

主な訪問地

フレーベル先生ゆかりの地　チューリンゲン地方

●エルフルト●バードブランケンブルグ●オーベルバイスバッハ●バード・リーベンシュタイン

フランス　ハンガリー

●パリ　●ブダペスト

旅行期間　1991年７月24日(水)～８月３日(土) 11日間

旅行代金　818,000円 全食事付き　（ローンによるお支払いも可能です。）

募集人員　25名　（定員になり次第締切らせていただきます。）

申込締切日　1991年５月31日(金)

企画：キンダーブックのフレーベル館

旅行主催：日本交通公社　運輸大臣登録一般旅行業第64号

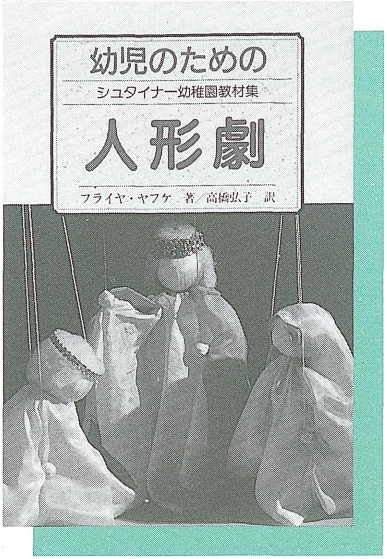
●お問い合せ先

フレーベル館　ヨーロッパ幼児教育視察係
東京都千代田区神田小川町３－１
〒101　電話 03（3292）7781(代)

JTB団体旅行新宿支店 ヨーロッパ幼児教育視察係
（運輸大臣登録一般旅行業第64号）
東京都新宿区西新宿１－18－８　スカイビル４階
〒160　電話 03(3346)0181(月～金09:30～17:30)

シュタイナー幼稚園教材集

幼児のための人形劇



念入りに、しかし控えめに仕上げられた美しい人形による劇は、子どものファンタジーを育てます。

・自然の素材を使ったかわいらしい人形の作り方と、脚本を紹介します。
・演じ方のこつと、子どもが演じる場合の注意も述べられています。
・人形劇が幼児の育ちに欠かせないわけを解説されているので、保育に生かせばよいかが分かります。
・ドイツ・シュタイナー幼稚園の現場の保育者による原書と、日本の保育現場で活躍する訳者のコンビなので保育現場にわかりやすい本になっています。

フライヤ・ヤフケ 著　高橋弘子 訳

四六判　132頁　定価1,500円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館